深呼吸

木のある暮らし

vol. 4

深呼吸

発行元：邑南町役場 地域みらい課 〒696-0192 島根県邑智郡邑南町矢上6000
［このまちの86%にドキドキしよう 邑南町は木育を推進します。］

木のある暮らし

深呼吸

vol. 4

深呼吸

発行元：邑南町役場 地域みらい課　〒696-0192 島根県邑智郡邑南町矢上6000

［このまちの86%にドキドキしよう　邑南町は木育を推進します。］

木のある暮らし

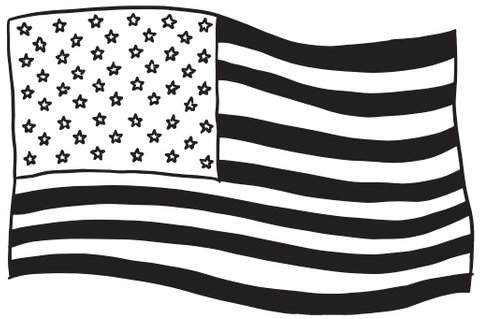
深呼吸

vol. 4

深呼吸

発行元：邑南町役場 地域みらい課 〒696-0192 島根県邑智郡邑南町矢上6000
［このまちの86%にドキドキしよう 邑南町は木育を推進します。］

深呼吸
4



Tyler Ziegert
Alexandra Williams
Shane Scott

田んぼは、
映画のワンシーン。

どこまでも続く山々も
広がる田んぼも、畑も
いつも目にする日常の風景。
でもそれが誰かにとって
特別な風景だとしたら。
あの映画で見た、
心に残るワンシーンに
見えるとしたら。

アメリカ合衆国からこの町へ

時を同じくして訪れている

３人がいます。

イリノイ州からタイラー・ザイガート。

マサチューセッツ州から

アレクサンドラ・ウィリアムズ。

オハイオ州からシェイン・スコット。

育った場所も、

日本に来たきっかけも違う3人。

外国人指導助手として

小中学校で働く中で

それぞれに見ている風景が

ありました。

庭を作る目線で自然を眺める。

Tyler Ziegert（タイラー・ザイガート）1992年イリノイ州生まれ。2021年から邑南町の外国語指導助手として町内小学校で勤務。

日本で行きたい50の日本庭園のリストのうち、すでに半分は訪れたというタイラ。「アメリカでは日本のように自然を借りてくるという感覚はありません。」と興味深く風景を眺める。

トトロと田んぼ

「子供の頃からジブリ映画を見ていたので、日本の田舎のイメージは何となく持っていました。邑南町に来て田んぼや畑が広がる風景を眺めるとともりのトトロに出てくるワンシーンのように感じてとても面白いです。」イリノイ州で生まれ育ったタイラは、学校生活の中で自然と触れる経験はあまりありませんでした。それだけに、自然の中で学ぶ邑南町の小学生の姿はとても新鮮に映ると言います。「田んぼや畑に囲まれていて、農家さんもたくさんいて、食べているものがどこから来るのかすぐそばで見られることはすごくいいと思います。自然と関係があることがとてもうらやましいです。」故郷で自然に触れた記憶と言えば、家族で毎年行っていたりんご園だったというタイラ。「私が行っていたのはアメリカの中でも大きなりんご園で、広大な敷地の中にカフェや乗馬などもあり家族で一日中楽しめるような場所でした。家族で毎年行っていたことから、大学の頃はりんご園のオーナーを目指したこともあります。日本のりんご園に初めて行った時は、全体が青い網で覆われていることに驚きました。その網で空や景色が見えないことは少し残念に感じましたが、家族でピクニックをしている姿は一緒で素敵だと感じました。」

邑南町で好きな場所は、自身が勤める日貫小学校がある日貫エリア。「日貫の日常的な風景、滝や田んぼを眺めるのが好きです。」

自分なりのカメラレンズで人生をのぞく。

Alexandra Williams（アレクサンドラ・ウィリアムズ） 1992年マサチューセッツ州生まれ。2021年から邑南町の外国語指導助手として町内の小中学校に勤務。

りんご園と庭師

祖父と父が庭づくりの趣味を持っていたこと、りんご園で過ごした時間をきっかけに人と自然をつなぐ場所を作りたいという気持ちが生まれ、大学では園芸学を専攻、その中で日本庭園NPOに強く惹かれました。その後アメリカで日本庭園を作る会社に就職し、本格的に庭師のもとで学ぶために2018年に初めて日本を訪れました。「日本庭園を学ぶ上で欠かせない足立美術館で研修をしました。足立美術館には電車に乗って行ったのですが、イリノイ州には高い山がないので、電車から眺める山々の風景が美しかったことを覚えています。自然がミニチュアになったものが日本庭園であることをその時感じることができました。」アメリカでは茶道や生け花、陶芸などにもチャレンジしあらゆる日本文化に精通するタイラ。今回再び日本を訪れ外国人指導助手として邑南町で過ごす中で、庭師ならではの目線を持って邑南町の風景を眺めています。「邑南町での生活はとても好きです。人も優しいし何より美しい景色と自然がたくさんあります。自然には不規則性と不完全さがあるから美しいと感じるのだと思います。日本の自然はダイナミックで生命に満ちています。自然を眺めて落ち着いた気持ちになったり、自由な気持ちになったり、インスピレーションを受けたり、活力を得られるような日本庭園をアメリカに戻って作りたいです。」

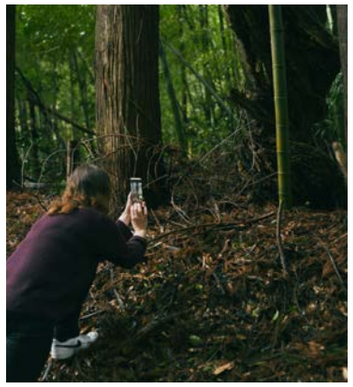
アメリカでは庭師として働く傍ら、裏千家茶道、池坊華道などの趣味を持ち知識も豊富。様々な角度から日本文化を見つめる。

今後は日本の造園会社でさらに見習いをしたいと考えているタイラ。「邑南町では伝統的な習慣やイベント、田植えや稲刈りなどをして地元の人と関わりたいです。」

家の近所にある神社を訪れるのが好きだというレクサ。「昔からある場所を眺めて、そこに作った人たちを想像するのが好きです。」

マンガと日本

「子どもの頃から日本のマンガやアニメが好きでよく読んでいました。小学生の頃は幽遊白書からマンガやアニメを通して日本を見ていたレクサ。そこに日本らしさを強く感じていました。「アメリカンコミックスに比べて日本のマンガやアニメには一貫したものがあると感じます。例えば桜や蝉の鳴き声など季節を感じさせるものが多く出てくることもそうです。日本の文化は独特で、言葉や表現は違っても日本人なら誰でも共感できるものが多いと感じます。日本のアニメでよく見る、田んぼのそばを学生が自転車に乗って通る風景は日本らしいと感じるシーンのひとつです。ジブリ映画もよく見ていたので、初めて邑南町に来た時は、もののけ姫みたいだと興奮しました。」日本に来るまでは、アメリカで3Dアニメーションの資格をとりその技術が生かせる仕事についていたレクサ。学校で3Dアニメーションの技術を教えることができるほどのスキルを持ち、個人的な作品制作にも取り組んでいます。「邑南町で経験していることは必ずアートワークに生かすことができます。インスピレーションを与えてくれる風景がたくさんあります。出会ったものそれぞれに意味や意義があり、日本独特の神話上の生き物や登場する動物などその関係性を考えることも刺激的です。3D環境で使用するテクスチャの写真を撮りためていますが、邑南町の写真は千枚以上撮っていると思います。」



訪れた場所で3Dアニメに使えそうな素材を見つけては写真を撮る。例えば木の表面や水面、たたみなど様々な写真を撮りためている。

憧れとカメラレンズ

小さい頃から憧れていた日本。一度は家族のために日本に行くことを諦めましたが、やはり強い気持ちがあり仕事の傍ら大学に入学、そして日本語を本格的に学びながら1ヶ月間日本への留学を経験しました。「人生はカメラレンズをのぞいているみたいだと気づきました。一度ズームアウトしてみると、大きいと思っていた山の小さに気づき怖いと思っていたことも乗り越えやすくなります。どこにレンズを当てるかによって人生の見え方が違ってきます。」その後ボストンにある子ども向けのサイエンスミュージアムで、3Dアニメーションや日本での経験を生かして働きたいという思いを持ちながら再び来日しました。今は大好きな日本で働くことができる喜びに満ちています。「日本の子どもたちに教えることはとても楽しいです。授業では英語のゲームを一緒にするのが好きです。子どもたちと一緒に給食を食べたり、昼休みに遊んだり、絵を描いてと言われて一緒に描くこともあります。」また、マサチューセッツ州で育ったレクサは日本の中の、自然豊かな邑南町で過ごすということにも大きな価値を感じています。「アメリカで過ごしていた時はいつもいろいろなことが起きていて忙しく、騒々しく感じることが多かったけれど、自然の中ではよりクリエイティブな思考になることができるし、自然や自分についてより多くの気づきがあります。周りに起こっていることが少ないということは、自分にとって何が大切かより明確に分かるということだと思います。」近くアメリカに帰国予定のレクサ。「働きたいと考えているボストンのミュージアムの近くには日本協会という施設があります。アメリカに住んでいても、ずっと日本とつながっていたいと思っています。」

「都市部より田舎に来てよかったと感じます。都会ではどこでも英語を話す人がいるので日本語が上達しません。邑南町ではもっと子どもたちと関わったり地元で参加できることを探して、会話をしながら日本語の練習をしたいです。」

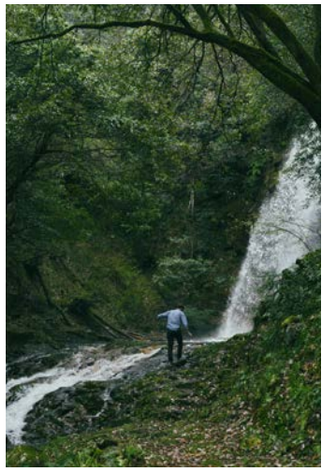
日本らしさと懐かしさを行き来する。

Shane Scott（シェイン・スコット）

1996年オハイオ州生まれ。2019年から邑南町の外国語指導助手として町内の中学校で勤務。

ポケモンとわらびもち

「言葉を覚えたての頃、テレビで見たポケットモンスターの151のキャラクター全ての名前を覚えて言うことができて両親を驚かせたことがあります。」初めての日本との接点はポケットモンスターだったというシェイン。9歳の頃には日本に住んだことのある子どもたちと一緒に日本語を学んだり、日本のお菓子を食べたりして楽しむ特別授業の時間があり、そこでの経験が日本に興味を持つきっかけとなりました。「そこでよく和菓子を食べていましたが、特にその時食べたわらびもちの美味しさは忘れられません。」大学ではボランティア講師助手として日本語を教えるなどより深く日本と関わるようになりました。「大学で良い先生に出会い、大学1年生、大学2年生と続けて日本に留学しました。日本に来るまでは、都会のイメージを持っていましたが初めて日本に来て愛知県の豊橋を訪れた時は、人が多くなくてゆったりとしていると感じました。でも邑南町に来て、もっと田舎があるんだと驚きました。」オハイオ州の自然豊かな場所で育ったシェイン。「家の近くには森があって、鹿などの動物に出会うことがよくありました。小さい頃は森でキャンプファイヤーをしたり化石探しをしたり自然に触れる授業もありました。邑南町では、山に登ったり滝がある場所に行くことが好きですが、森の中を歩いているとふと懐かしいと感じることがあります。」



シェインが邑南町で好きな場所のひとつ赤馬滝。「音も風も心が平和になる気がします。夏は涼しいし、動物にも出会うことができます。」

「自然は命をあげるということだと思います。木は水や土から育つ。そして春になって新しい芽が出て葉が出る。そこから出る空気を動物がもらう。そのサイクルが自然。」

太鼓の練習をするたびに手の皮がむけるためテーピングは必須アイテム。アレクサンドラもあらがね太鼓に参加し、主力メンバーの一人となっている。

あらがね太鼓ではいちばん大きな太鼓を担当することも多いシェイン。誰でも叩けるものではなく技術はもちろん筋力、持久力も必要とされる。

サックスと あらがね太鼓

日本語を教える仕事も、日本という国も好きなシェイン。日本に滞在する間は様々なことにチャレンジしたいと考えています。外国語指導助手として中学校に勤める中で、昔から続けているサックスの経験を生かして吹奏楽部にも所属しています。「サックスは小学5年生の時から続けています。中学校の吹奏楽部でサックスを教えることは自分から希望しました。中学校で英語を教えることも楽しいけれど、部活動でサックスを生徒に教える時間は特に好きな時間です。コミュニケーションをはかりながら、自由に教えることはとても楽しいです。」また、邑南町に来てすぐに参加したあらがね太鼓では地道に練習を続け今やメンバーの中でも欠かせない主力の演奏者となっています。「あらがね太鼓は、ほかの楽器と違っていろいろなバリエーションがあることが楽しいです。難しく大変だと感じることもあるけれど、太鼓の種類も多くいろいろなことにチャレンジできます。また、太鼓を習う他のメンバーと仲良くできることも楽しいです。指導者である西川さんにもとてもお世話になっています。邑南町に来て、人のつながりや連帯感を感じることが多いです。いつか家族ができたら邑南町に住みたい。そのくらい大好きな町です。」

長年あらがね太鼓の指導を続ける西川さんへの信頼は厚い。コロナ渦では人が集まりにくく2人きりの時もあった。

エピソード

Episode

取材にあたってアレクサンドラさんを自宅に招待し、夕食を一緒に食べるタイミングがありました。その時に彼女はしきりに、「勇気を出していろいろな人に話しかけたい。」「勇気を出していろいろな場に参加したい。」と言っていました。それを聞いた時、私は彼女を含めこの町で過ごしている3人にとって全てがチャレンジであることを改めて意識することができました。アメリカから遠く離れた日本に来ていることも、その中でも小さな田舎の町に来ていることも、そこで働いていることも自分に置き換えて考えてみるととてもエネルギーのいることです。でもそれほどまでに3人にとって訪れたい、魅力のある国が日本なのだとうれしくもなりました。自分にとって当たり前の風景は、他の誰かにとっては特別な風景であるかもしれない。そのことに気づかせてもらったことは、私に新しい視点を与えてくれた気がします。改めて車の窓から、家の窓から、今まで何気なく眺めていた風景をゆっくりと眺めることが楽しみになりました。（ライターS）

深呼吸

編集後記

文／
湯浅 孝史
写真／
足袋井 竜也

ぼくは人見知りをしますのでタイラたち相手でも当然天気の話をします。今日って雨なんですね、と雨が降っている中、何の意味にもならないことを言っています。

そんな雨が心配だった撮影日、

3人の「邑南町の好きな場所」にあがった候補地に時間や天候の許す限り撮影に回りました。撮影場所は行ったことがある場所も、実は行ったことがない初めての場所もありました。あらためて邑南町は、広くて深いです。

タイラ、レクサ、シェインは、この広くて深い邑南町をすいすいと泳ぐように楽しまれてる感じがしました。ジブリや幽白、初代ポケモンだった日本がいまや、日貫の田んぼや、布施の赤羽滝、矢上のあらがね太鼓にまでつながっていて、きっと、3人のチャレンジにたくさんのご縁が実ったんだと思います。

ふと思い返して邑南町の風景の少し足元を見ると、滝にはそこに行くまでの道が整備されてて、田んぼのあぜは草刈りがきちんとされています。あらがね太鼓も毎週公民館に練習の灯がともります。そう思うと、邑南町の風景は〝手つかず〟という類の壮観さとはちょっと違って、脈々と誰かが維持してきた、昔からつながる〝暮らしの今〟を見つめているという感じがします。ちょっとホッとする綺麗さ、と言いますか。（タイラならもっと素敵な表現をしてくれるんですが…）

もしかしたらこの町にトトロはいないかもしれません。でももしトトロに会ったら、いま赤馬滝と布施の人たちをお勧めしたい気持ちなんですが、まあ、また天気の話をしてしまうかもしれません。

深呼吸　4

STAFF

Editor
湯浅　孝史

Photograph
足袋井　竜也

Writer
米田　幸

Designer
米田　光希

発行元
邑南町役場 地域みらい課

2023年7月 発行

本誌掲載の内容の無断掲載および写真、
イラスト等の無断複写を禁じます。